

令和 8 年度東京都特定外生物（キョン）防除対策検討委員会（第 1 回）
議事概要

1. 開催日時 令和 8 年 7 月 21 日（火） 13:30～15:15

2. 開催形式 WEB によるオンライン会議

3. 議事

- 1) 令和 7 年度の事業報告について
- 2) 令和 8 年度の事業計画について

4. 出席者

■検討委員

石井 信夫	東京女子大学 名誉教授
織 朱實	上智大学大学院地球環境学研究科 教授
深澤 圭太	国立研究開発法人国立環境研究所 主任研究員
松浦 友紀子	国立研究開発法人森林総合研究所 主任研究員

■臨時委員

加瀬 ちひろ	麻布大学獣医学部 准教授
小池 伸介	東京農工大学大学院グローバルイノベーション研究院 教授（欠席）
羽澄 俊裕	元東京農工大学農学府 特任教授（欠席）
八尾 明	公益社団法人東京都猟友会 代表理事会長

■関係機関

中村 大樹	大島町 産業課長
本間 政人	環境省関東環境局伊豆諸島管理官事務所 国立公園管理官（欠席）

■東京都

長井 彰吾	東京都総務局大島支庁 特定外来生物対策担当課長
鈴木 雄大	東京都総務局大島支庁土木課大島公園事務所 課長代理
矢部 和夫	東京都総務局大島支庁土木課大島公園事務所 課長代理
関口 優雅	東京都総務局大島支庁土木課大島公園事務所 主事
吉長 貴大	東京都総務局大島支庁土木課大島公園事務所 主事
高野 成美	東京都総務局大島支庁産業課林務担当 主任

（事務局）

原水 珠代	東京都環境局自然環境部 生物多様性戦略推進担当課長
飯島 梨佳	東京都環境局自然環境部計画課野生生物担当 課長代理
平井 雅規	東京都環境局自然環境部計画課野生生物担当 主事

■事務局

一般財団法人自然環境研究センター

5. 配付資料

資料 1-1：令和 7 年度キョン防除事業報告

資料 1-2：令和 7 年度キョン捕獲結果

資料 1-3：捕獲事業の評価

資料 1-4：生息状況モニタリングの結果

資料 1-5：希少植物への影響に関する有識者ヒアリングの結果

資料 2：令和 8 年度防除事業実施計画（案）

参考資料：ネコ屋内飼育推進普及啓発チラシ

6. 議事内容

（1）令和 7 年度の事業報告について

1）令和 7 年度キョン防除事業報告について

- 昨年度から開始した事業は捕獲報奨金事業か。

→そうである。（事務局）

2）令和 7 年度キョン捕獲結果及び捕獲事業の評価について

- 非カバー率の図の凡例に誤りがあるため、誤解のないように修正する必要がある。
- 単独銃器捕獲の SPUE は増加している一方、CPUE は減少している。目撃頭数は増加しているものの捕獲頭数は減少していると捉えられるが、原因に何が考えられるか。

→（事務局）事業者からは、擦れ個体が増えて捕獲しにくい状況になってきていると聞いている。

→組織銃器については、柵があることにより擦れ個体の影響を受けづらいと考えられる。

単独銃器についても擦れ個体を捕獲できる方法を検討するきっかけと感じた。

→（事務局）事業者より、サーマルスコープを使うことで捕獲効率を高められるとの報告があった。このような現場での工夫を引き続き試していく。

→SPUE のトレンド変化は、サーマルスコープを導入したことで発見効率が上がったことが関係しているか。

→（事務局）SPUE の増加はサーマルスコープ導入以前から確認されている。擦れ個体が増えていることが原因である可能性は高いと考えている。

→今後はトレンド評価の点においてサーマルスコープの存在は大事なポイントになるだろう。

- キョンの行動を見て、捕獲に繋がってない理由について情報収集するとよい。待機射撃など他の手法にした方がよいというような提案もできる。

- 事業別手法別捕獲頭数の表の捕獲頭数が 0 とは、その捕獲手法を実施しているけれども捕獲されていないのか、そもそも実施していないのかで意味が変わってくるので、区別できるようにするべき。

→組織銃器に死体回収が含まれているが、死体回収は銃器で捕獲したわけではない。誤解のないように記載すべきである。

→（事務局）修正する。また、どういう状況で捕獲に繋がっていないのかという点について情報収集する。

- 市街地では箱わなや囲いわなは張り網と併用して設置しているのか。

→（事務局）基本的に併用はしていない。

- 南部では箱わなと囲いわながあまり実施されてない理由は何か。

→（事務局）今後、南部の市街地にも捕獲事業区を広げていくことで、箱わなを増やしていけるだろう。囲いわなについては、捕獲事業者の捕獲技術も関係していることから、北部に設置されている状況である。

→張り網で捕り残したメスを捕獲するために、捕獲個体の性差の偏りが少ない囲いわなを南部に展開していくとよい。足くくりわなもメスが捕獲できるため、今後は捕り残されたメスの捕獲を足くくりわなが担っていくことになるのではないかと。

3) 生息状況モニタリング結果について

- データの時系列から見て市街地の推定生息個体数の顕著な減少が気になる。解析のモデル構造に何かしら強い仮定が入っており、データのトレンドに追従しないという結果が出ているのであれば、モデル自体を見直す必要があるだろう。

→（事務局）市街地では捕獲頭数に対して推定個体数が低くなっており、強い仮定ができてしまっており、観測モデルの傾向よりも、システムプロセスの効果が強くなっている状況と考えられる。この点は改善を試行している。

→CPUE の値そのものはそれほど下がっていないが、このモデルを使って個体数を推定するとこの結果になるという理解でよい。

→（事務局）自然増加率が地域ごと年度ごとに変動しない強い仮定を置いているため、このようなパターンになっている。各観測モデルの縛りが緩いために、市街地では捕獲頭数を反映して急減する結果になったと考えている。

→捕獲頭数は市街地では減っているか。

→（事務局）増加傾向である。推定される個体数に対して捕獲頭数が多いために、自然増加率以上の減少が見られている。

→捕獲数が多いと推定個体数がこの程度減少するはずだ、ということが、結果に反映されているという理解でよい。

→（事務局）そうである。

4) 希少植物への影響に関する有識者ヒアリング結果について

- 植生保護柵を設置したことでかえって盗掘を増やしてしまうような状況はないか。
→ (事務局) 植生保護柵を設置している場所は事業者以外はほとんど立ち入らない場所である。現時点で盗掘は認められていない。
- (東京都) 植生保護柵に植生を保護している旨の表示をしてない。
- 希少種の保全について島民の理解促進が重要と考える。
→ (事務局 (東京都)) 島民向けのチラシに農作物や希少植物などへの食害について記載しており、自然を守るためにもキョンの根絶を目指していることを周知している。
- (事務局) キョン排除柵の内外で植生変化を比較した結果を掲載している。今後、植生回復が進んだら成果を還元していきたい。
- 事業の成果を住民にタイムリーに提示していくことが重要である。そういった視点で様々な取り組みをしてほしい。
- 令和6年度のヒアリング以降に新たに被害が確認された植物種とは、初めて食害が確認されたということか。それとも、食べていることが新たにわかったのか。
→ (事務局) 今まで食べられていなかったが、最近急激に食べられるようになったということである。
- キョンが今まで食べていなかった種を食べるようになっていくことは、植生への影響が拡大しているということであり、注意しなければならない。

5) 令和8年度防除事業実施計画(案)について

- 追込み捕獲はどの事業で行うか。
→ (自然研) 大島キョン防除委託(急傾斜地・空白域捕獲)での実施を予定している。
- 大島キョン防除委託(急傾斜地・空白域捕獲)と大島キョン防除委託(火口域捕獲)が今年度新しく追加されるということか。
→ (事務局) そうである。
- 今年度は防除市街地の対象範囲を南部にも広げるとのことだが、今後は誘導柵や箱わなの設置が増えるということか。
→ (事務局) 新規の捕獲事業区を設置することに加え、既存の事業においても、張り網や箱わなを増やしていく予定である。
- 自動通報システムを使うと非常に効率的だという結果が出ていたが、今年度の足くくりわなによる捕獲では自動通報システムを使う予定はあるか。
→ (事務局) 急傾斜地・空白域事業においては自動通報システムが使われる想定である。
- 過去にセンサーカメラを用いてキョンの網へのかかり方を調査したが、キョンは張り網沿いをよく歩くため、そこに足くくりわながあればよく捕獲できるのではと期待している。
- 住民説明会の雰囲気はどうであったか。

- （東京都）住民説明会を3カ所でそれぞれ日にちを変えて開催した。用意した席がほぼ埋まる状況であった。農業や植物関係で困っているという意見、このような場が設けられることを待っていたという意見、もっと情報が欲しいという意見があった。対面で意見交換の場を設けることで、より理解を深めてもらえたと思う。
- ネコの屋内飼育や市街地防除の拡大について、例えば学校教育においても情報提供をしていくことを検討するとよい。
- 住民説明会では、捕獲手法について意見はあったか。
- （東京都）個別の捕獲手法に対する懸念はそれほど多くなかった。特に足くくりわなについてはネコの錯誤捕獲の懸念があるため丁寧に説明したが、ネコに関する質問はほとんどなかった。可能な限り様々な経路で取り組みの説明を実施したい。
- 誘引はわなだけでなく銃器捕獲にも有効であり、捕獲効率を高めるために誘引は重要になってくるだろう。早めにこれを現場に実装できるとよい。
- （事務局）4月に春季の誘引試験を実施したが、その際は誘引物に関して誘引効果が確認できなかった。7月に夏季の誘引試験を実施予定であり、水などの誘引効果について確認する。
- 足くくりわなは、今まではネコの錯誤捕獲があるため導入できずにいたが、今年度からは主に森林域で導入されることが事業計画に明記され、市街地に関しては調整等の準備が始まる。できる限り広い範囲に足くくりわなを導入していくことが望ましい。特に、今年度を含めて3年間で個体数を目に見えて減らすことが課題になっており、それを達成できる手法として足くくりわなに期待する。その点を意識して事業展開を図ってほしい。並行して、住民に対してもこの状況を説明し、理解と協力を得ていくことが重要である。